

平成 17 年度 中学校第 1 回入学考査問題 (社会) 海 城

(その 1)

問題 次の文章をよく読み、図を見てあとの問いに答えなさい。

日本は、(1)まわりを海にかこまれ、南北に細長い弓形をしています。択捉島から与那国島までを直線でむすぶとおよそ 3300 キロメートルになります。日本の国土は、北海道・本州・四国・九州の 4 つの大きな島と沖縄島などおよそ 7000 の島じまからできています。そして、太平洋・日本海・東シナ海・オホーツク海の 4 つの海に囲まれています。

首都の東京を中心にして円をえがき、日本の国土を入れて表すと《図 1》のようになります。これを見ると、海のむこうのとなりの国ぐにがとても遠く感じられませんか。

いっぽう、日本の「北のはし」や「西のはし」とされる択捉島や与那国島をふくむ地域に、円の中心をもってきてえがいてみた《図 2》や《図 3》を見たとき、君たちはどういう印象を持つでしょうか。地図の中心をどこに置くかで世界を見る目がかなりちがってきますか。

でも、地図の話だけではなく、実際に、「北のはし」の地域に住んでいる人びとや「西のはし」の地域に住んでいる人びとにとっては、海のむこうの世界は《図 2》や《図 3》に示されたように身近に感じられてきたのではないのでしょうか。そして東京などはむしろ遠く感じられてきたのではないのでしょうか。

たとえば、《図 2》の地域では観光客でにぎわう宗谷岬からロシア連邦のサハリン州が見えます。最近、(2)稚内とサハリンは定期航路で結ばれました。稚内市の小学生がサハリンに向かうロシアの船の中で操舵室（船をあやつる人がいる部屋）に入れてもらって大喜びしていたそうです。また、サハリン州の州都ユジノサハリンスク市内では札幌市営交通で使われていたバスが走っています。

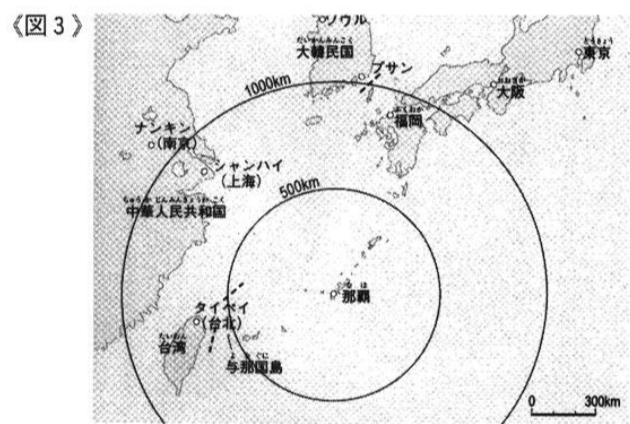
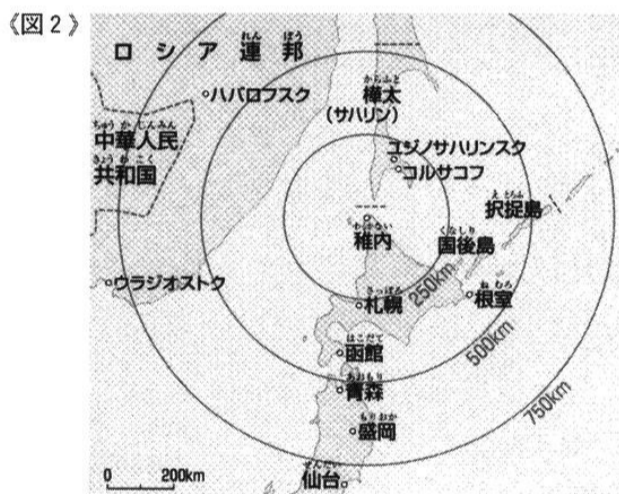
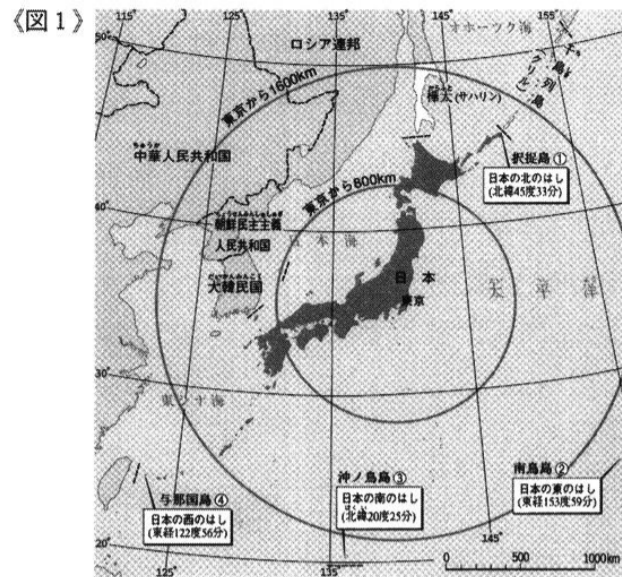
《図 3》の地域ではむかし、(3)沖縄県が琉球王国とよばれていたころからアジアの国ぐにとの貿易や人の行き来がさかんでした。(4)昭和の初めごろには、与那国島の小学生が卒業旅行に台湾へ行き、それをきっかけに台湾の学校へ進学したり、台北（台北）で働いたりすることはごくあたりまえのことだったといえます。

このように、国土の「はし」といわれる地域には、海のむこうの世界との独特のつながりがあるのではないのでしょうか。それは、国の中心とされる東京にばかり視点をおいているとわからないことなのかもしれませんね。

こうしたことは、何もいま始まったことではありません。たとえば、「鎖国」のような時代でさえ、実際に海のむこうの世界とのつながりを深めてきたのは、江戸幕府にとっての国土の「はし」とされた(5)松前、対馬、長崎、薩摩などに住んでいた人びとでした。

ところで、君たちは(6)海そうの「こんぶ」を日本で最も多く食べているのは、「こんぶ」などとれるはずのない南の沖縄県の人たちだということを知ることがあるかもしれません。実際に沖縄県には「クープイリチャ」をはじめ「こんぶ」を使った料理がたくさんあります。いっぽう、東京のスーパーなどで売られている「きざみこんぶ」などのなかには三陸海岸などでとれた「こんぶ」もありますが、日本で「こんぶ」の生産量が最も多いのは北海道です。もちろん宗谷岬付近でとれる「こんぶ」も沖縄県へ送られています。

つまり「こんぶ」を通じてわたしたちの目には遠くはなれて見える《図 2》と《図 3》の地域が大きいつながりをもってくるのです。なぜこんなことが起こるのでしょうか。不思議な「なぜ」ですね。こうした食べるものにかかわることがらは、長い歴史のなかで人びとが親しんできた習慣や食べ方の好みなどによって形づくられることが多いのです。ですからいまのくらしの流行や好みだけを考えていても、このような「なぜ」は解けないことがあります。今君たちが生きている社会を本当に理解するためには、今の社会に対して心の底から「おもしろいな、なぜこんなことが起こるのかな」と興味をもつことはもちろん大切なことです。そして、その中で地域のくらしのちがいや時間の流れのなかで作られてきたものを考えてみるのが大事になってきますね。



問1、下線部(1)について、日本人はむかしから魚などをたくさん食べてきました。最近では各港で水あげされる魚などの量や種類が減っています。そして外国からの輸入が増えています。この原因のひとつに、1977年に世界で決められた、魚をとる時の「きまり」があります。それはどんな「きまり」ですか。解答らんにあわせて答えなさい。

問2、下線部(2)について、稚内市では、問1の「きまり」が世界で行われるようになってきたこともあって、漁業協同組合が中心になってホタテガイやエゾバカガイの赤ちゃんを海にはなし、おとなになってから取ったり、サケやマスをふやしたりする漁業が行われるようになりました。このような漁業のありかたを何といいますか。

海 城

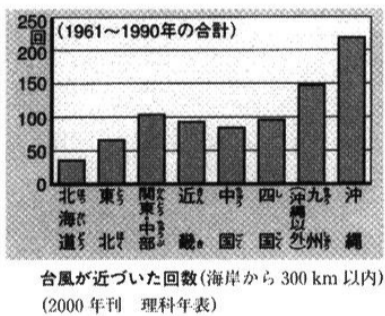
(その3)

問3. 下線部(3)について、次の《写真》は、いまの沖縄県で見られる住宅のようすです。この《写真》と《グラフ》・《地図》を見て、なぜこのような住宅にする必要があるのか、住宅の外見と屋上の給水タンクに注目し、沖縄地方の①気候の特徴と、②地形の特徴からいえることを説明しなさい。

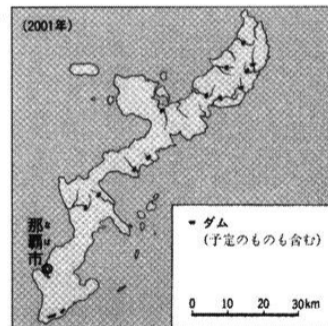
《写真》



《グラフ》



《地図》



問4. 下線部(4)について、なぜ与那国島と台湾との行き来がさかんだったのでしょうか。地理的に近いという理由だけでなく、次の《証言A》・《証言B》も参考にしてこの時期の日本と台湾の関係を明らかにしながら100字以内で説明しなさい。

《証言A》「戦前の与那国では台湾と同一の時刻を使っていたので、与那国から同じ県内の那覇へ行くには時計の針を一時間早めました」

《証言B》「与那国では日本の銀行が出すお金より台湾の銀行が出すお金のほうが力がありましたね。町の役場に納める税金も台湾の銀行が出したお金で納めていました」

※《証言》はいずれも宮城政八郎著『与那国物語—台湾の見える島』(ニライ社)より

問5. 下線部(5)について、松前では、アイヌの人たちとの交易の権利をあたえられた商人たちが、アイヌの人たちを安い賃金で働かせたり、不利な取引をさせたりしてきました。これに対して武力をもって抗議したアイヌの人の名前をカタカナで答えなさい。

問6. 下線部(6)について、実際に「こんぶ」を商品として人びとが現在一年間にどのくらい買っているのかを調べてみると、下のような《グラフ》ができあがります。これを見ると、必ずしも沖縄県の人びとが最も多く「こんぶ」を食べているのでもなさそうです。むしろ、意外な事実がうかびあがってきます。次の《説明文》と《資料》・《地図》を見て、北海道で最も多く取れる「こんぶ」を食べる習慣が南の沖縄にまで広がっていった歴史的な理由を180字以内で説明しなさい。ただし、次の3点に必ずふれること。

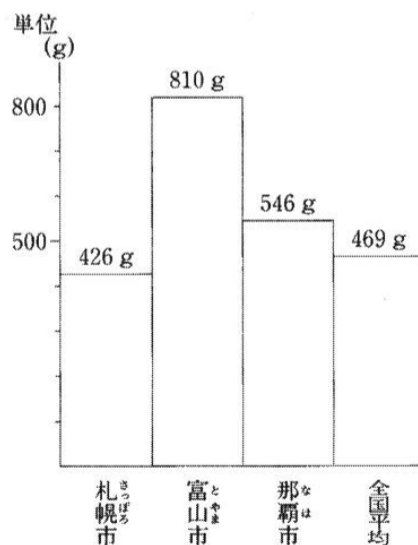
- ①江戸時代に「こんぶ」などを運んだ船の名前とその役割を明らかにすること。
- ②富山の薬売りと薩摩藩との関係を明らかにすること。
- ③薩摩藩と琉球王国との関係を明らかにすること。

《説明文》

17世紀末以降の富山藩では、貧しくなってしまった藩の経済を立て直すために漢方薬（中国のやり方や材料で作られた薬）をつくり全国に売り歩くことに力を入れました。しかし、19世紀の前半には薩摩藩自身が漢方薬をつくってもうけを独り占めしようとしていました。そして富山の薬売りたちをのぞこうとさえしたのです。次の《資料》は、このとき薬売りたちが薩摩藩に出したお願いの手紙をやさしく書き直したものです。

《資料》「薩摩藩の領地のなかで、これまでどおりわれわれ富山の薬売りが薬を売りさばくことをお許しいただけるならば、商売にかかる税金とお礼のこんぶ（10000斤）を薩摩藩に毎年お納めつづけます」

《グラフ》一つの世帯が「こんぶ」を買う量（年間）



いずれも総務省統計局『2003年家計調査年報』による

〈地図〉

